

富士通コンサートシリーズ



©Nikolaj Lund

©Marco Borggreve

©Felix Broede

ミヒャエル・ザンデルリンク指揮 ドレスデン・フィルハーモニー 管弦楽団

2019

ヴァイオリン：ユリア・フィッシャー

7/1 月

18:30 開場 19:00 開演

福岡シンフォニーホール

ACROS Fukuoka
もっと近くに! 25th

ブラームス：ヴァイオリン協奏曲
ブラームス：交響曲第1番

※止むを得ない事情により、曲目・出演者が変更になる場合がございますので、予めご了承下さい。

主催／TVQ九州放送・福岡県・福岡市

(公財)アクロス福岡・(公財)福岡市文化芸術振興財団

共催／福岡EU協会

協賛／富士通株式会社

FUJITSU

shaping tomorrow with you

曲 目

第一部

ブラームス ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.77 (ヴァイオリン:ユリア・フィッシャー)

第1楽章

アレグロ・ノン・トロッポ

第2楽章

アダージョ

第3楽章

アレグロ・ジョコーソ、マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェ

*

第二部

ブラームス 交響曲第1番 ハ短調 Op.68

第1楽章

ウン・ポーコ・ソステヌート - アレグロ

第2楽章

アンダンテ・ソステヌート

第3楽章

ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーゾ

第4楽章

アダージョ - ピウ・アンダンテ
- アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・プリオ

※止むを得ない事情により、当日出演者が変更になる場合がございますので、予めご了承下さい。



©Wacker Fotoservice



©Markenfotografie

(指揮)

ミヒヤエル・ザンデルリンク

Michael Sanderling

ベルリン生まれ。1987年、20歳でマズア指揮／ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管のソロ・チェリストとなる。1994年から2006年までベルリン放送響で同職を務めたほか、ソリストとしてボストン響、ロサンゼルス・フィル、パリ管ほか多数のオーケストラに客演。2000年ベルリン室内管弦楽団との共演で指揮者デビュー。伝説的な巨匠クルト・ザンデルリンクの息子として幼い頃から指揮者の仕事を良く知るミヒヤエルは、次第に指揮活動が主軸となる。2006年ポツダム・カンマーアカデミーの芸術監督兼首席指揮者に就任。現在、2011年から首席指揮者を務めるドレスデン・フィルのほか、世界の著名オーケストラを指揮している。2017年4月、文化宮殿の新たに改修されたコンサート・ホールにドレスデン・フィルが移転。柿落とし公演では彼の指揮のもと、シューベルトの歌曲(独唱はマティアス・ゲルネ)、ブラームスのヴァイオリン協奏曲(独奏はユリア・フィッシャー)、そして象徴的なフィナーレ、ベートーヴェンの「第九」交響曲から「歓喜の歌」が演奏され、喝采を浴びた。

(ヴァイオリン)

ユリア・フィッシャー

Julia Fischer

ドイツ生まれ。類稀な才能を持つ天才アーティストとして世界的に知られている。11歳にしてユーディ・メニューイン国際ヴァイオリン・コンクールで優勝。その後もグラモフォン賞、ミデム・クラシカル賞など多数の賞を受賞した。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィルなど多数の楽団のほか、P・ヤルヴィ、サロネン、デュトワら巨匠指揮者と共に演。世界の一流コンサートホールやヨーロッパ各地の音楽祭に登場している。デビューCDは、「エコー・クラシック賞」を、2011年にリリースされた「ポエム」は、「ドイツ・レコード批評家賞」を受賞。2009年にリリースされたバッハのヴァイオリン協奏曲集は、iTunesのクラシック音楽部門で史上最速のスピードで売上を伸ばした。またヴァイオリン奏者でありながら、2008年元日には、ピンチャード指揮ユング・ドイチ・フィルハーモニー管弦楽団とグリーグのピアノ協奏曲を演奏したことでも知られる。この演奏会ではさらに、ヴァイオリニストとしてサン=サーンスのヴァイオリン協奏曲第3番をも演奏した。



©Felix Broede KASSAKARA



©Markenfotografie

ドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団

Dresdner Philharmonie

ザクセンの州都ドレスデンのオーケストラとして、150年の伝統を誇るドレスデン・フィルハーモニー管弦楽団は、音楽的にも様式的にも幅広いレパートリーを持つ。ロマン派のレパートリーでは極めて独特な「ドイツ」サウンドを維持しつつ、バロック音楽、ウィーン古典派、現代音楽に必要なサウンドとスタイルの柔軟性も培ってきた。初期の頃から著名な作曲家が同団の指揮台に立ってきたが、その中にはブラームス、チャイコフスキイ、ドヴォルザーク、R. シュトラウスから、ペンデレツキ、ホリガーまでが含まれている。首席指揮者は、1967年～1972年に首席指揮者を務めたクルト・マズアのほか、前任者にはパウル・ファン・ケンペ恩、カール・シューリヒト、ハインツ・ボンガルツ、ヘルベルト・ケゲル、マレク・ヤノフスキ、ラファエル=フリューベック・デ・ブルゴス、そして2011年よりミヒャエル・ザンデルリンクが務めている。現在、ミヒャエル・ザンデルリンクの指揮のもと、ショスタコーヴィチとベートーヴェンの交響曲を組み合わせた新しいCDシリーズが、ソニー・クラシカルからリリースされている。

曲目解説

J.ブラームス(1833-1897) ヴァイオリン協奏曲ニ長調 Op.77

ブラームスの唯一のヴァイオリン協奏曲であるこの作品は、ベートーヴェン、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲とともに、古今の三大名曲の一つに数えられている。協奏曲の傑作が同時代の名演奏家を対象に書かれた例は多いが、ブラームスの場合も例外ではない。この作品は、当時ヨーロッパでもっとも権威あるヴァイオリニストとして広く認められていた、ヨーゼフ・ヨアヒムのために作曲されたものである。

ヨアヒムはハンガリー生まれのヴァイオリニスト。彼が有名になったのは何といっても、ベートーヴェンの＜ヴァイオリン協奏曲ニ長調＞の再演によってである。当時弱冠13歳のヨアヒムは、メンデルスゾーンの指揮のもと、初演以来38年間も再演されなかったベートーヴェンのこの作品を再演し、その真価を世に知らしめたのだった。このように古典音楽のよき理解者だったヨアヒムが、古典音楽信奉者のブラームスと良き信頼関係を築いたのは、ごく自然のことだったといえよう。そしてブラームスがこの協奏曲を構想したもう一つの動機は、この曲が書かれる直前の1878年に初めてイタリアを訪れた際の、イタリア古典美術から受けた感銘だったという。こうした経緯からこの協奏曲は、当時流行の華麗な技巧を披露するスタイルとは一線を画した、古典的様式感を強く打ち出した作品として、ブラームスならではの特質をそなえることとなった。

第1楽章アレグロ・ノン・トロッポは、古典派の伝統を踏襲したスタイルで書かれているが、主題のほかに現れる多くのエピソード楽想が、この楽章を壮麗で威厳に満ちたものとしている。

第2楽章アダージョは、オーボエの魅力的なソロで始められる。サラサーテが「オーボエが全曲中唯一の旋律を奏し聴かせているのを、ステージの上でヴァイオリンを手にしてぼんやり立ち聴きしているほど私が無趣味だと思うかね」と苦言を呈したエピソードは有名。しかし続く独奏ヴァイオリンの高度な変奏技法と叙情美は、それにも増して印象的だ。

第3楽章アレグロ・ジョコーソ・マ・ノン・トロッポ・ヴィヴァーチェは、ジプシー風の精力的なフィナーレ。ブラームスはここで、ハンガリー生まれのヨアヒムを意識したのだろうか。

ミヒャエル・サンデルリンク指揮
ドレスデン・フィルハーモニー
管弦楽団
ヴァイオリン：ユリア・フィッシャー

交響曲第1番ハ短調 Op.68

ブラームスは生涯に4曲の交響曲を残したが、その最初の作品であるこの「第1番」が完成したのは1876年、ブラームス43歳のことである。22歳の時に着手して以来、実に21年もの歳月が費やされたという、これは音楽史上稀にみる遅筆として名高い。ブラームスが作品をなかなか完成できなかった理由は、自作に対する過剰なまでの厳しさと、何より偉大なベートーヴェンの9曲の交響曲の存在だったといわれている。彼は当時「なぜ交響曲を作らないのか」という質問に、「ベートーヴェンの9つの交響曲があるのに、それにつける必要があるでしょうか」と答えたというが、ベートーヴェンの本道をさらに前進させる一歩は、それだけ重く、多くの労苦をともなうものだった。

この交響曲を聴いた指揮者のハンス・フォン・ビューローが、ベートーヴェンの9曲の交響曲に続く「第10交響曲がついに現れた!」と絶賛したというエピソードは、広く知られている。実際この作品は、きわめてベートーヴェン的な構成、展開を感じさせる作品といえるだろう。「運命」と同じハ短調で書かれ、「暗く悲劇的なものから、力強い闘争を経て明るい勝利へ」という内容にも、ベートーヴェンの影は色濃い。しかしそれ以上に、ブラームスの音楽的特質がはっきりと刻印されているのは言うまでもない。特に両端楽章の堅固な構成と綿密な筆致は、この作曲家ならではの独特的の風格を誇っている。

第1楽章は、重厚で力強い緊張感にあふれた序奏(ウン・ポーコ・ソステヌート)に始まり、情熱的な第1主題と牧歌的な第2主題で構成される主部(アレグロ)が続く。

第2楽章アンダンテ・ソステヌートは、寂寥感に満ちた楽章。後半のヴァイオリン独奏とホルンの掛け合いが美しい。

第3楽章ウン・ポーコ・アレグレット・エ・グラツィオーソは、ブラームス特有の鄙びた曲想。

第4楽章は暗い序奏(アダージョ)に始まり、勝利を高らかに歌い上げるかのような主部(アレグロ・ノン・トロッポ・マ・コン・ブリオ)で、壮麗なクライマックスを築く。

曲目解説：柿沼 唯（作曲家）

CONCERT INFORMATION

アクロス福岡開館25周年記念

ワレリー・ゲルギエフ指揮

マリinsky歌劇場 管弦楽団

現代のカリスマ、ゲルギエフが贈る
オール・ロシア・プログラム。

演奏予定曲目

ショスタコーヴィチ:

交響曲 第5番

チャイコフスキイ:

ヴァイオリン協奏曲 ほか

2019年

11/28 木

18:30 開場 19:00 開演

© E.Miyoshi

芸術総監督・首席指揮者

ワレリー・ゲルギエフ

ヴァイオリン

五嶋龍

料金(全席指定・税込) GS席 22,000円/S席 20,000円/A席 18,000円/B席 16,000円/C席 14,000円(学生券 7,000円)

お問い合わせ/ 092-725-9112 アクロス福岡チケットセンター (10:00~18:00)

ウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団 ニューイヤーコンサート2020

2020年1/6 月

18:30 開場 19:00 開演

指揮・ヴァイオリン
ヨハネス・ヴィルトナー
美しく青きドナウ他

料金(全席指定・税込) S席 8,500円/A席 7,500円/B席 6,500円/C席 5,500円

お問い合わせ/ ヨランダオフィス・チケットセンター 0570-033-337



※演奏予定曲目は都合により変更になることがあります。

TVQ九州放送

<http://www.tvq.co.jp>